京都岡本記念病院

ともに

Vol.06
2021.12

がん相談支援センターだより

第1回 行政、医師が語るがん医療の「いま」から、地域連携のあり方を考える

『がん地域医療連携を考える会』開催

地域のがん診療の連携やコロナ禍でのがん診療を考える、『第1回がん地域医療連携を考える会』を10月23日、京都岡本記念病院を会場にWebとのハイブリッド形式で開催しました。当院はこれまでも、宇治徳洲会病院とともに、地域がん診療連携拠点病院として山城北医療圏でのシームレスながん医療の提供に取り組むべく、勉強会、意見交換の場を設けてきました。今回の講演会では、登壇者それぞれの視点で語られるコロナ禍のリアルながん診療から、地域連携のあり方を探りました。

受診控え、手術減少、進行がん増…コロナ禍が、がん診療に及ぼす影響

がん診療、手術に携わる病院の医師からは実際の診療データをとおしてCOVID-19が、がん治療に及ぼす影響が報告されました。ステージ初期のがんが減少し、進行がんが増えている傾向から、検診控え、受診控えが、がん発見の遅延につながっていることを指摘。大腸がんの外科手術では、根治的手術が困難となり緩和的手術が増加していることも報告されました。京都岡本記念病院消化器外科の工藤道弘医師からは「COVID-19のまん延は、がん治療に確実にマイナスの影響を与えているが、一方ではがん診療をさらにブラッシュアップさせ、がん治療体制を確立するチャンスととらえたい」と、今後を見据えた前向きな意見が聞かれました。

陽性患者の在宅診療、看取り…「覚悟を決めて患者を診る」

新型コロナは在宅診療の体制にも大きな影響を与えました。訪問診療に携り、宇治久世医師会の会長でもある堀内房成医師（ほりうち医院　城陽市）は自身がワクチン未接種の頃から陽性者の在宅診療や看取りを続けてこられました。感染と常に隣り合わせの危険な経験から、コロナ禍で安全に在宅診療を行うためには患者の情報を多職種で共有する体制が不可欠と強調。さらには終末期の在宅患者が多い現状、在宅緩和ケアの目覚ましい進歩に対応できる人材が不足していることなど現場が抱える問題を訴えました。

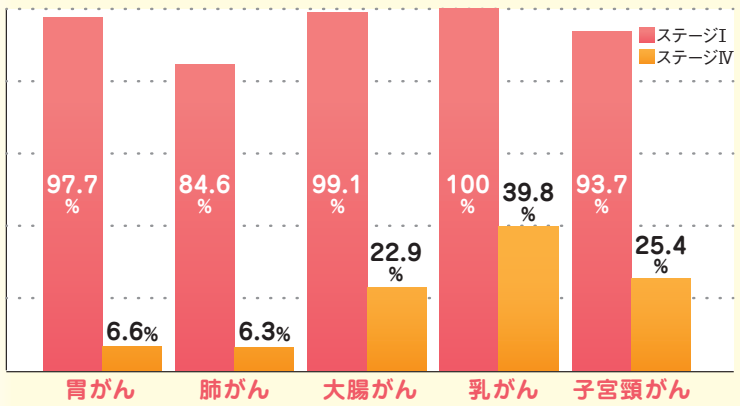
当日はオンラインを含め80名を超える医療・介護関係者が参加し、がん診療、在宅診療に対する関心の高さがうかがえました。当院ではこれからも、病院、医師会、行政が意見・情報交換する場を設け、地域全体で、がん患者を支える体制を構築していきたいと考えています。

コロナ禍でもがん検診を受けましょう!

がんは病期が進むにつれ生存率が減少することから、検診での早期発見が重要といえます。

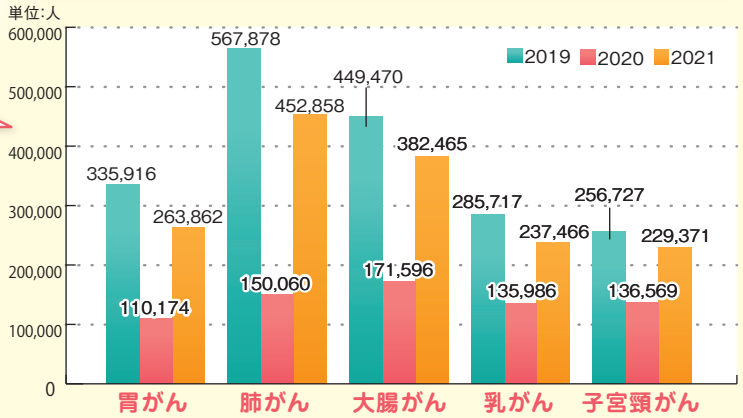
しかしコロナ禍での外出自粛の影響から、がん検診の受診率はコロナ発生前の水準を下回っており、検診控えによるがんの見逃しが危惧されています。当院では新型コロナ感染防止に努めております。安心して健診・人間ドックをお受けください。

5年相対生存率



出典:『全国がんセンター協議会 部位別臨床病期別5年相対生存率(2010-2012年診断症例)』

5つのがん検診受診者数の推移(2019~2021年の各1-6月)



出典:公益財団法人　日本対がん協会

2019年と2021年を比較すると17%減少しています

京都岡本記念病院 健診センター

TEL 0774-48-5611(直通)

大切にします
こころとからだ やすらぎを

社会医療法人　岡本病院(財団)

京都岡本記念病院 がん相談支援センター

〒613-0034 京都府久世郡久御山町佐山西ノ口100番地

TEL 0774-48-5500(代表)　FAX 0774-46-7835

［受付時間］　月曜日~土曜日　午前9時~午後5時

★医療関係者・開業医の皆さまは地域医療連携室へお問い合わせください。TEL 0774-46-5981 / FAX 0774-46-7835